

第4期第16回生涯学習センター運営協議会議事要旨

〔日 時〕 2020年2月19日（水）午後1時～3時

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 学習室1・2

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：柳沼恵一（会長）、大野浩子、白崎好邦、鈴木忠道、陶山慎治、辰巳厚子、堂前雅史、服部くに子、古里貴士、向井美子、米倉茂、以上11名

事務局：塩田センター長、大野管理係長、植松担当係長、高木事業係長、鈴木担当係長、中野担当係長、岩田担当係長、三橋主任（記録）

〔欠席者〕 ※敬称略

太田まゆみ 1名

〔傍聴人〕 なし

〔資 料〕 【1】 町田市生涯学習センターに求められる役割について（答申案構成）

【2】 第4期町田市生涯学習センター運営協議会報告書(案)

【3】 2019年度下半期事業報告資料

開 会

会 長：第16回生涯学習センター運営協議会を始める。次第に沿って進める。

1 報告事項

(1) センター長報告

第4期の生涯学習センター運営協議会も、本日が最後の会議となった。委員のみなさまには大変お世話になり、感謝申し上げます。そして、連日の報道のとおり、新型コロナウイルスの感染がじわじわと広がっており、不安感が高まっている。影響が多方面に及ぶ模様で、今後生涯学習センターの事業にも影響してくるかもしれない。委員のみなさまにおかれても、健康に気を付けて過ごしていただきたい。私から業務に関して2点、報告する。

- ・ ことぶき大学の中の1講座に「探・探ゼミナール」という講座がある。受講生がそれぞれ興味、関心のあることについて、図書館などを活用して調べ、学習する講座である。その成果発表会が明日、センター7Fのホールで行われる。この運営協議会からも柳沼会長、〇〇委員が受講生として発表を行う。
- ・ 障がい者青年学級においても、毎年度1年間の学級生の活動の集大成として、成果発表会を行う。今年度は、2月22日に土曜学級、3月1日の日曜日に公民館学級、3月8日の日曜日にひかり学級の発表会が行われる。歌や踊り、この1年間に活動した記録の様子など、活動への想いが込められた発表の場である。

(2) 町田市生涯学習審議会の議論について

会長：町田市生涯学習審議会の議論について説明したい。1月23日に第12回、2月14日に第13回が開催された。主に、答申案の検討ということだったが、残念ながら、私は運協の開催日でもあった1月23日は、欠席させていただいた。最終回である2月14日の第13回には出席し、答申案の検討をおこなったが、資料1がその答申案の概要である。まず「1 町田市の生涯学習を取り巻く環境」の「(1) 社会環境の変化」では、人口減少、少子高齢化、ICTの普及、外国人居住者の増加などが課題として記載された。「(2) 市民の学習を取り巻く環境」では、市内に生涯学習センター（公民館）は1館という町田の状況で、教育委員会だけでなく、市役所内の各部署で学習支援の取組を展開しているということが記載された。「2 生涯学習センターの概要」の「(1) 生涯学習センターとは」では、多少理念的なことが記載された。2012年に新たな出発をし、公民館と市民大学の統合と、新たな機能として「計画立案」「総合調整」「情報提供・発信」「学習相談」がこの時点で追加されたとのことであった。「(2) 生涯学習センターの現状及び課題」では、我々がずっと議論したことも盛られており、「市民のニーズを踏まえ、市内唯一の施設としての学習環境を整備していくことが必要」と記載された。「3 これからの生涯学習センターについて」ということで、「(1) 誰もが学べる環境をつくる」、「(2) 課題解決を支援する」、「(3) 学びの裾野を広げる」、「(4) 学びのネットワークづくりを促進する」ということで、色々と方向性が示された。具体的などころは今後の検討課題になると思う。ボリューム的には全9ページぐらいで、まだ第13回から少し議論があるので、場合によってはその部分が少し追加になるかもしれないが、これを見ていただければだいたい内容は分かると思う。質問は受けないで、次に進めたいと思う。

(3) 東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：資料4をご覧ください。第56回東京都公民館連絡協議会が2月1日に昭島で開催された。委員部会は第4課題別集会在担当で、事例発表を中心にした勉強と、それに基づいたグループディスカッションによる交流をおこなった。「3 今回の活動のまとめ」ということで、グループ討議の中で出てきた、あるいは運営者からも交通整理で出てきた、「①自分たちの困っていること、課題等身近な問題を取り上げる」、「②目的、やりたいことを明確にする」、「③活動は、楽しくやる、情熱をもってやること、そして自己の成長を実感する。」ということがキーワードになっている。町田からの事例発表は、「ゆるっとママ」さん。具体的な話を聞くことができ良かったというアンケートがあった。

2 議題

(1) 第4期町田市生涯学習センター運営協議会報告書(案)について

会 長：議題に進みたい。第1議題は「第4期町田市生涯学習センター運営協議会報告書(案)」ということで、この間私は欠席したので、副会長からお願いしたい。

事務局：（本日の配布資料の説明）

副会長：今回の報告に関しては、微修正という話もしていたが、色々と付け加わった部分や修正もあるので、そこを中心に意見をいただきたい。今、事務局から説明があったとおり、コメントのオレンジ色の部分は、各委員のコメントなので、その方が書きたいことを書いているので、事実誤認がない限りは構わないと思う。紫色の出していただいた意見に少し対応して付け加えた部分が、3ページ下と、6ページ（3）、（4）のところに入っている。これは前の会議の時には無かった部分になるので、今確認いただき、良ければそのまま採用ということでよろしいかと思う。

委 員：コメントは全部400字入っているのか。

事務局：ワード機能で確認して、超えていた方へは連絡させていただき、まだ一人だけ修正していただいている方がいる。

委 員：行数が多いなと思うが。

事務局：改行が入っているものもワードの機能で確認している。

副会長：まず紫の部分で何か意見があれば出していただきたい。この修正でよろしいか。ちなみに6ページのところで「行政」という文言を削っているが、補足説明をすると、これはその下の文章で「行政」について触れている部分がない。あと8ページ（2）の市民ニーズに応えるための情報収集と発信のところで、主に「行政」のことについて触れているので、中身にあわせて6ページ（4）の見出しを整えるということで、「行政」という文言を削ってはどうかということ。もしよければ、この修正でよろしいか。

委 員：8ページの方の「行政」に触れているところは、情報収集と発信の文脈の中だが、例えば市民大学では違う部署と連携して講座を組んでいる部分があるので、そういう部分はもっと関係強化していった方がいいと思っている。他の部分で触れているから6ページの「行政」は削除するとのことだが、6ページの（4）の本文では触れていないとしても、行政内部の部署の連携という意味が、6ページの（4）の見出しに入ってもいいと思う。

委 員：「行政」は残してもいいと思う。

副会長：それでは「行政」という文言はそのまま残すということで。本文中では触れていないが、見出しだけでも出すということにしたい。紫のところについてはよろしいか。あと、ご意見を出していただかなければいけないのは、柳沼会長に緑で修正や追加をしていただいた部分と、私が9ページのところで3行だけだが加筆している部分について意見をいただきたい。まず柳沼会長から、簡単に説明いただきたい。

会長：報告書の中の部分には参加していないので、そういう意味では第三者の目で読ませていただいた。少し分かりにくいところの訂正ということで提案させていただいた。2ページの「(2) 市民ニーズへの対応」の「①各委員のイメージによる議論」という見出しの「イメージ」という文言が分かりにくくて、本文を読むと、協議会の委員の方々が実際に得た体験や情報に基づいた議論のようなので、私が思う「イメージ」とは、それこそ概観、外面という印象があって、経験に基づいた価値観を含んだ感想という意味では、「所感」という言葉が適切ではないかということで、「印象や所感による」という表現の方が分かりやすいと思い、訂正した。5ページの「3 市民ニーズを把握する仕組みの見直しについて」の「(1) 生涯学習センターの認知度の低さ」について、「低さ」という文言はいわゆる問題点であって、3の見出しが「見直し」ということなので、問題点ではなくて向かう方向性みたいものが必要ではないかということで、「向上・改善」という表現が適切だと考え、訂正した。7ページの生涯学習NAVIの市民意識調査の記載の仕方について、「2012年、2017年いずれにおいてもNAVIについて「知らない・読んでいない」と回答した人が8割に達している」ということだが、これも誤解を生むのではないかと思う。「知らない」という人と、「読んでいない」という人は区別して記載した方がより分かりやすい。2017年度の調査の結果を利用して、「毎号読んでいる」と回答した人の割合は回答者全体の3.5%、「ときどき読んでいる」が7.7%で、読んでいる人の割合は11.2%、それから「知っているが読んでいない」が9.0%、「知らない」が69.2%と、読んでいない人の割合は78.9%ということで、統計を見るとNAVIが知られていないという事は非常に問題点としても考えられると思うが、知っている場合には半分以上の人は読んでいる、半分の人には読んでいない。そういう意味では、もう少しNAVIを認知させることによって読んでくれる人が増える可能性もあるということで、その辺を正確に記載した方がいいのではないかと思います、このような表現に書き換えた。8ページの、電子媒体のNAVIとの相乗効果を狙いながら見直しをするということだが、4行目で「2007年から旧態依然と続けている紙媒体のNAVIを見直す必要がある」との記載があるが、2012年にこのセンターができる時に大幅に内容が改訂され、2012年までは生涯学習部本体で、2012年からはセンターで取りまとめており、内容的には、2012年までは図書館や博物館、自由民権資料館などセンター以外のところの活動状況についてレポートをしているという内容で、現在のNAVIとはだいぶ違っており、それなりに工夫し、やり方を変えているという点では、「旧態依然」とは少し言い過ぎかと思い、そこの部分は削除した方がよいと考える。さらにICT活用によるデジタル配信というのが今はないが、かなり予算も必要になってくると思うが、これがあると色々な人がどこでも自由な時間に見ることができるし、場合によっては外国の方が翻訳を使って内容を理解できる、将来的にはそういったことも含めて、環境の整備を付け加えるということ。これは実は生涯学習部の答申の中でも取り上げられているので、センターとしても一応書いておいて、将来の布石になればという意味も込めて追加した。同じく8ページの(2)のところに「市民ニーズ=市民生活課題」という表現があるが、これは必ずしもイコールにはならなくて、市民生

活課題から発生してくるのが市民ニーズということで、このような表現に書き換えた。

委員：今回の中間まとめでは、皆さんの思ったことを入れようということなので、議事録にも載っているが、会長の発言で「イメージを出し合おう」とあったので、私は「イメージによる議論」とした。現実はやったことを述べた方がいいということで、「イメージによる」と使った。「所感による議論」は変な言葉だと思うが、まあよしとしたい。それからNAVIのところ、2012年に少し模様替えしたと言われたが、2012年のところのパーセンテージと2017年とあまり変わっていないということで、「2012年、2017年いずれにおいても」という表現を選んだので、今の修正内容だと2012年が消えてしまうので、私の提案は、「学習や教育の情報源として十分に活用されていないということが示唆されます。」の後に、「この傾向は2012年市民意識調査とあまり変わっていません。」この文章を入れていただきたい。具体的に言うと、これは推進計画に書いてあったデータだが、2012年の調査で「読んでいる」は10.3%、「知っているけど読んでいない」は9.8%、「知らない」は71.6%で、ここに書かれている分類で表すと、9.8%と71.6%で81.4%になる。81.4%が78.9%になったということで、同じようなものなので、「この傾向は2012年市民意識調査とあまり変わっていません。」この文章を是非入れていただきたい。

副会長：今の〇〇委員の意見も踏まえて、何か意見があれば出していただきたい。もしないようであれば、緑の部分を修正するということでよろしいか。

全員：はい。

副会長：最後に、私が簡単に付け加えたところで3行しかないが、一文加えているのでこの部分について意見をいただきたい。黄色のマーカーのところである。

委員：黄色の部分ではなく、前段のところの結びの部分だが、「明確にしていかなければなりません。」という表現がここだけ断定的である。この間、「ここは中間まとめなので、あまり結論みたいなことは書くべきではない」と話し合った。例えばこの部分は、「明確にしていく必要があります」ぐらいの表現にこの間を変えたような気がする。

副会長：もうちょっと強さを抑えるということか。

委員：私はこの間議論した時にあまり断定した覚えはない。だから、「明確にしていく必要があります」ぐらいの方がいいのではないかと思う。

副会長：今の意見に対して、よろしいか。

全員：はい。

委員：それから黄色の部分の2行目の「限られた条件の中で」という文言は、何となく役人的で当たり前、これは報告書なので、削除した方がスッキリする。自らこう

しましようという報告書なので、「限られた条件の中で」と自ら枠をはめるのは変な話で、どちらが大事かと言ったら事業改善の方が大事である。

委員：このことに関して言わせていただくと、「限られた条件」というのは具体的には予算である。よくこの場でも出るが、「予算がないからできない」という発言が出ていたと思うが、「予算がないから出来ない」ではなく、これでいこうと決まった予算であればその中で上手く工夫していく、という意味でこの「限られた条件の中で」という文言を捉えていた。

副会長：〇〇委員のご意見としては、残した方がいいのではないかということか。

委員：はい。

副会長：〇〇委員はいかがか。

委員：いない。だから、全然真っ向から違う意見だと、この3行取りましようという話。条件の中でどうこうというのはここでは関係ない。本来、市民ニーズについて議論して、それに向けて「こうしよう」「こうした方がいいでしょう」ということで、自ら「限られた条件の中で」という枠をはめるのはおかしい。そんな予算の中でどうのこうのは当たり前ではないか。これは「どうすべきか」という報告書なのだから、必要であれば「そういう予算の枠をもっと広げなさい」とか、言えるものでなければいけない。それを「上から言われた予算の中でしっかりやりました」という報告書はおかしい。どちらが大切か、予算が限られているのであれば、その中でどうやって使うか優先順位を付けて議論すべきである。必要だったらもっと予算を広げていただこう。提案する時に、自ら予算がこれしかないから、その中で頑張りましようなんていうのは、全く意味がない。予算が限られているのは当たり前のことである。

委員：当たり前のことができないのが問題なのである。

委員：だったらそれは別の項目である。こういうことを言わなければいけない。

副会長：相対する意見が出ているが、他の委員からも伺いたい。

委員：これはどなたが書いたのか。

副会長：これは私が書いた文章である。

委員：〇〇委員はもともとどういう意味で書いたのか。

副会長：これは何で「限られた条件の中で」と書いたかと言うと、前回「選択と集中」という話が出ていた。要は「市民ニーズに沿ってこういう取り組みが必要である」と言うけれども全てはできない。要望しても、増やすだけ増やしても全てはできない。ただ「選択と集中」という言葉は使いたくない。それは、何かを切り捨てていく時に使われる言葉なので、自分の中では使わない。「こうして欲しい」「ああして欲しい」と言っても、今加えていくもの、さらに、「付け加えていくだけでは無理だ

から整理をしなければいけない」という話が出ていたので、それを「選択と集中」という言葉を使わずに、どう表現しようかなと思ったときに付けたのがこの言葉。これが、「限られた条件の中で」という意味。簡単に言うと「整理をしなくてはいけない」という意味である。

委員：であれば、私は真っ向から違う意見なので、この文字はとっていただきたい。今の趣旨からいくと、私が前から思っている「仕分け」だと思う。先程も会長が言われたとおり、他の部署でも色々生涯学習をやっているのだから、そういうところと連携してやらないといけない。ここで何を本来やるべきで、ここがリーダーシップをとって何をやらなければいけないか、そこの仕分けができていないような気がして、今、〇〇委員が言っていることは、それに通ずるものがあるかなと思う。「選択と集中」が嫌であれば「仕分け」、「仕分け」も嫌であれば、よく事業に「優先順位をつける」と言うので、そのような言葉にしてはどうか。

副会長：表現としてはこれを使わずに、別のニュアンスで表現しようということか。

委員：「限られた条件の中で」を取っ払って、今言われたような内容を言葉にして、入れ替えたらどうか。「仕分け」というのはまた敏感な言葉なので、何か良い言葉はないか。「選択と集中」でもいいと思うが、〇〇委員が「選択と集中」は嫌いと言うので使わなくてもいいのだが、「優先順位をつける」とか。

副会長：今の意見を受けて思ったのは、先程、他の部署や民間との連携を行っているという話があったので、それを広げつつということで、要はセンター以外のところに主導でお任せするところはお任せして、センターでは一体何をすべきかということを整理するということだと思うので、「連携をさらに図りつつ」みたいな表現を入れるといいのかなと思ったが、逆にニュアンスが伝わりづらいのかなとも思う。

委員：先程の会長の話でも「市役所内の各部署で」という表現で書いていたと思うが、「市役所内の各部署と連携しながら」とか、そのような意味の言葉になるのではないか。市役所内の各部署と連携すれば、予算の話も当然出てくるわけで、当然条件の中でやることになるので。

委員：全体として私たちが思っているのは、行政やNPOと連携したり、市民力をもっと活用していくという結論なので、ここでもめるなら、全体がそういう主旨で考えているわけだから、無理にこの文言を加えないでいいのではないか。全体が連携と市民力の活用、「まちチャレ」にしてもそうだが、そういうものをもっと盛り上げていこうということなので、そのように具体的に書くか、「限られた条件の中で」という文言は特に必要ないと思うので、そこを「連携や市民力の活用」という文言に置き換えるのはいかがかと思う。

副会長：その前のところで「市民力」という言葉は使っていないので、置き換えるとしたら、6ページ(4)の見出しを使って、「行政、教育機関、NPO、市民団体、民間機関と強化しながら」という表現はどうか。

全 員：はい。

副会長：それでは、「限られた条件の中で」という表現は削って、6 ページ（4）の文言を活かした表現にするということをお願いしたい。

委 員：最後に一点、〇〇委員とこの間、最後に議論して結局このように終わったが、こうして分けることもよく考えたがあまりよろしくないので、一応このままにして、右側のところの「” ころ” と” からだ” の健康学」の後に「他」を追加していただきたい。

副会長：3 ページ⑥の一番右のところか。

委 員：そうだ。〇〇委員には申し訳ないが、ここの項目を分けるよう言われたが、分けたら分けたで分けづらかったので、基本的にはHATSのことに関してこういうものがあるということ。

委 員：それでいいのではないか。

副会長：それでは、3 ページの表⑥の一番右の欄「・・・健康学」の後に「他」を入れるということ、追加していただきたい。他に何か意見はあるか。

委 員：目次の3（4）の見出し「一般行政、NPO、民間機関との関係強化」の「一般行政」は「行政」でいいのではないか。何か使い方があるのか。

副会長：「教育行政」は首長の部局から独立しているので、「教育行政」と使い、首長のもとにある行政を「一般行政」と言うのは、教育分野だとよく使う表現である。

会 長：6 ページ（4）の見出しと統一していただきたい。

副会長：それでは、6 ページ（4）の見出しと統一して、「一般行政」ではなく「行政」にするということ。その他についてはよろしいか。それでは、報告についてはここまでにしたい。

会 長：コメントの方で、私の記憶だと「400字以内でまとめる」という話は聞かされていない。分量的にまだ調整が必要だと思うので、400字以内で統一して考えたい。最終的には、またメールで委員の方にもう一度見ていただき、何もなければ完成ということに進めたいので、これからの事務については事務局に一任するかたちでよろしいか。

全 員：はい。

(2) 2019年度下半期事業分析

会長：それでは、議題の（２）、今回のメインテーマである２０１９年度下半期の事業分析を、各担当者から説明を簡単に聞いて議論したい。まずは、市民大学からお願いしたい。

事務局：担当係長３名と私とでそれぞれ関わっている箇所と、直接関わっていない箇所も説明させていただくので、どんどん説明者が代わることを了承いただきたい。

市民大学の「多摩丘陵の自然入門」について説明させていただきたく。これは市民大学の中で唯一の通年の講座である。前期については既に報告したが、生涯学習センターに初めて参加した方の割合が４８．１％で、市民大学の中でも比較的初めての方が参加しやすい講座になっている。今回、珍しく自然講座については定員割れを起こした。５０名募集のところ３６名。実際野外だと講師の声が届きやすいとか、皆さんの移動のことを含めると、担当者としてはやりやすかったところもあった。野外の講座の場合の適正な人数というのが、今回課題として上がったと思う。

事務局：「環境講座」についてご説明させていただく。概要については、今期は講義と実習をセットで組み合わせながら、エコや環境保全について学んだ、全９回の講座。応募倍率は募集定員を下回り０．８８倍であった。昨年度が０．７５倍だったので、０．１３ポイントアップしている。NAV Iを見て申し込んだ割合は１９％。生涯学習センターに初めて参加した人の割合は３８％であった。成果としては、「講座終了後のエコ活動に取り組みたい」という意欲を示した人は、効果指標で目標にした８０％を超えて９３％であった。本講座を通じてエコ活動については地球にやさしい活動への理解を深めていただけたのではないかと思う。

事務局：「町田の歴史について」説明させていただく。全１０回で、金曜日の午後に行った。昨年度は木曜日の夜間や火曜日の夜間に行っていた。夜間から午後に変更したことが関係しているかどうか分からないが、女性の受講生が２０名ほど、全体の４０％を占めており、新しい掘り起こしになったと思う。また、応募者数が８５人で、１．７倍の倍率になり、大変人気のある講座である。同様に、初めて参加した割合が３７．２％、NAV Iを見て申し込んだ割合は１８．６％、比較的新しい層の方に参加いただいている。また、修了生３名の方に「まちだ史考会」に入会していただいたので、生涯学習の推進に繋がられたと思う。

事務局：「くらしに生きる法律」について説明させていただく。こちらについては５２名の定員のところ５４名の応募があり、全員受講いただけるように案内をしたが、その後キャンセルがあって４８名の方が受講された。広報まちだ、募集案内、生涯学習NAV I、それぞれをご覧になって、実はこちらは複数回答なので１００を超えるが、色々なものを見ながらご応募いただいている。また、受講された方は割と良好な出席状況で、修了者の方や、皆勤の方も割と人数が多めだったと思う。ただ、２０１８年度の時には修了団体が初めて法律にもできたが、２０１９年度については、交流会への参加そのものも５人と少なく、修了団体の設置には至らなかった。

事務局：「人間科学講座」についてご説明させていただく。ITやゲノム技術の発展による生活や環境の変化、テクノロジーの変化によるいのちや暮らし、守るべき人権についてなど、毎回違ったテーマで学習した全9回の講座である。応募倍率は募集定員を超える1.44倍であった。昨年度は1.14倍だったので、0.3ポイントアップした。初めて参加した人の割合は22.2%であった。成果は平均出席率も85%と昨年度よりもさらに3ポイント上がった。多くの方に興味を持ってもらえて良かったと思う。また、講座の満足度を計る効果指標も、目標とした数値を上回ることができ、多くの方に満足していただけた。

事務局：「"こころ"と"からだ"の健康学」について説明させていただく。これは、唯一外に出て講座をやろうということで、堺市民センターのホールを使い行った。前期に続いて、後期も行った。その効果が表れ、生涯学習センターに初めて参加した人の割合は51.3%で、相原の方からは「中々ここまでは来られないけれど、地元でやってくれるなら」ということで多くの方が参加された。前期に参加した方も、そのまま続けて後期に応募して参加という嬉しい効果があった。

事務局：「まちだの福祉」について説明させていただく。「福祉を知り、制度を活かし、地域に生きる」を主テーマに子どもから高齢者まで、分野を問わず幅広い福祉を学ぶということで開催している講座である。前期同様、昨年までは昼の開催だったが、夜間の開催にした。残念ながら定員には満たなかったが、平日の昼間開催では見られないような昼間働いている方、福祉現場勤務の方や保育士、教師の参加があった。前期同様、毎回講義後に30分ぐらいグループディスカッションを行い、最初はあまり話が盛り上がりませんかと思っていたが、皆さん活発にそれぞれの気持ちや仕事を背景に、議論が深まって良かったと思う。反面、昼間に開催を希望される方もたくさんいらっしゃるということで、来年以降は、昼間、夜間のどちらにも対応できるような時間帯の検討が必要と思っている。

会長：ただいまの市民大学の説明について、質問、ご意見があればお願いしたい。

委員：歴史について、毎年人気があるようだが、テキストの内容は大分変わってきているのか。

事務局：通史をテーマに扱うと、例年講師の方が別のものを作るようにしており、毎年刷新されている。

委員：「まちだの福祉」について、昼間、夜間のどちらにも対応できるような時間帯を考えるとのことだが、昼の時間帯で開催すると夜の時間帯で開催すると、ミックスで開催するのか、それとも別の2講座で開催するのか。

事務局：今のところ、前期については平日の午後、後期については平日の夜間に開催していこうと考えている。そうなってくると、ある程度ターゲットが見えてくるので、そのターゲットに合わせてのプログラム内容にするということで、これまでは前期、後期ともに全般のことを網羅するような内容であったが、来年度は変わってくると

考えている。具体的には、平日夜間だとリタイヤした方や高齢の方が想定されるので、そのような方に合わせた内容にしていこうと考えている。

委員：「"こころ"と"からだ"の健康学」について、堺市民センターで初めて受講したという方が5割ぐらいということで、例えば、小山や上小山田、下小山田など、中々こちらの方に通えない方、遠隔地の地域の方を対象にすることを今後検討していくのか。

事務局：来年度については、市民大学は外に出すことをやめて、「ことぶき大学」を外に出すことを考えている。具体的には「ことぶき大学」の音楽を堺市民センターで実施したいと考えている。堺市民センターは駅から歩ける距離ということと、施設を公用で使用する場合に、稼働率が高い施設を連続で使うのは難しく、稼働率が高くないので連続で使いやすいという点で、堺市民センターを考えている。

会長：他に何かご意見はあるか。市民大学の検討もまとめていただいて、その中で色々時間を変えてみるとか、場所を変えてみるとか、そういうアイデアについても早速実行に移されているようだが、それなり違った結果が出てきたようである。これも何回もやることによって、さらに最適な時間帯、場所を模索していくことになると思う。

委員：多摩丘陵の自然入門について、子どもの参加がなかったということだが、中学生のみのグループなら1人分の資料代3,000円は、少し高いと思う。私がちゃんと知らなかったのがいけなかったが、不登校の子どもにこの講座を紹介してあげられたらと思った。今後は、もう少しちゃんとチェックして伝えていきたいと思う。

事務局：来年度もこの講座は継続する。

委員：よろしく願います。

会長：素晴らしいアイデアである。

事務局：アイデアは〇〇委員からである。

委員：学校には行けないけど、特定の場所に行ける子は多いので、今後も継続していただきたい。

会長：色々な講座同士のプログラムのアレンジという話があり、例えば、健康学と福祉学を交えたらどうかというアイデアも確か出ていたと思う。その辺も来年度は検討していただきたい。それでは、とりあえず市民大学については終わりにして、次、公民館事業の説明をお願いしたい。

事務局：「市民提案型事業講座づくりまちチャレ」について説明させていただく。2019年度は5講座実施した。「ロコモ予防体操」は、南市民センターで全5回開催した。狙いは、運動習慣を身に付けロコモを予防し、健康長寿を目指すことである。応募倍率は0.9倍で参加者は27人だった。講座修了後は、南市民センターで、ロコ

モ予防体操を続けていく自主サークルが立ち上がった。南地区で学びの機会を提供できた結果として、継続的な学習に繋がったと思う。

「もっと知りたい！町田ならではの歴史と文化」は、生涯学習センター、鶴川市民センター、図書館の3ヶ所で、年5回開催した。狙いは、町田の歴史的文化的遺産を学ぶことで、町田のあるべきまちづくりを考えていくことである。応募倍率は0.83倍で参加者は25人だった。成果としては、「町田の歴史、文化を理解した」「まちづくりを考える上でのヒントになった」と回答した方の割合は、目標とした80%には届かなかったものの、それぞれ70%に達し、講座の狙いはかなりの部分で達成されたと思う。

「最期まで自分らしい生き方・暮らし方講座」は、生涯学習センターで全5回開催した。狙いは、地域で安心して暮らしていく過程で何ができるかを考えていくことである。応募倍率は定員を超える1.5倍で、参加者は定員の30人である。成果としては、毎回グループで話し合いの時間があつたので、受講者同士の交流も深まり、講座修了後の自主サークルの立ち上げに繋がった。

「親子で学ぶ備災」は、健康福祉会館、教育センター、生涯学習センターの3ヶ所で、全5回開催した。狙いは、災害に対する正しい知識と、危険から小さい子を守るための行動を身に付けることである。応募倍率は募集人数と同じ1倍で、参加者は親子15組である。成果としては、「災害から子どもを守るための知識が身に付いた」「地域連携や共助の必要性が理解できた」と回答した割合は目標値を上回ることであり、講座の狙いは大いに理解いただけたと思う。反省としては、母子同室での講座となったが、大きな会場を使用することが多かつたので、子どもの様子が気になり講師の話に集中できない親が多く見受けられた。また、子どもが騒ぐと講師の声が聞きづらくなるという場面が見受けられた。

「ママもパパもたまにはゆるっとしませんか」は、生涯学習センター、芹が谷公園の2ヶ所で、全5回開催した。狙いは、子育て中の親に自らを見つめ直す機会や、心をリフレッシュする機会をつくることである。応募倍率は1.27倍で、参加者は28人である。成果としては、子連れ参加、母子同室での講座だったが、こちらの方は部屋が狭かつたり、担当した職員も普段から家庭教育支援学級を担当している職員ということで、特にトラブルもなく、参加者同士の繋がりがもてたということである。また「自分を見つめ直すことができた」「心をリフレッシュすることができた」と回答した割合は、目標値を上回る90%以上に達した。

事務局:「家庭教育支援事業」についてご説明させていただく。この家庭教育支援事業は、家庭教育支援基盤形成事業費という補助金を受けており、補助金を受けるにあたっては、家庭教育支援運営委員会を開催して、事業計画を策定することが要件となっている。町田市では、この生涯学習センター運営協議会を運営委員会と位置付けて行っているので、ご承知置きいただきたい。実施した講座について、対象別の講座は、内容も中々そういう意味ではかなり突っ込んだもので、自分の中で難易度が高

いと思っている方が多いように見受けられる。感想では、何人か同じような思いを持っている方と一緒に色々考えたり、学び合って、自分を客観的に見て考え直す機会になったということが見受けられる。きしゃポップ事業では、父親が参加する、「パパと一緒にきしゃポップ」を大分前からやっているが、近年参加する父親が増加している。理由としては、父親の意識の変化もあげられるが、母親に「あなた行ってらっしゃい」と言われて来られている方も結構いるようである。この理由については、家庭教育支援事業としては把握したいと思っている。ちなみに3月にお父さん講座ということで、チラシも配布しているが、父親を対象にした講座を、単発で行う予定である。

事務局：「障がい者青年学級」についてご説明させていただく。今年の成果としては、応募者全員を抽選することなく、新入生として受け入れることができたことである。また、下半期、9月から12月にかけて、それぞれ例年どおりの合宿や日帰り旅行を行い、12月には市庁舎で行う「まちカフェ！」にオープニングアクトとして歌を歌い、クリスマス会には地域のダンスサークルと交流を持ち、1月には地元アイドルのガールズクワイアと新年会を行ったりと、3つある学級のそれぞれの特色を活かした活動をすることができた。課題としては、社会教育主事や、この春から導入される社会教育士の実習受け入れ先として、地域の大学との連携を図っていききたいということである。支援者の不足が生じているのは変わらない状況なので、これを解決するためにも、地域の大学との連携を考えている。

事務局：その他事業の、「コンサート事業」についてご説明させていただく。コンサート事業は前期で3回実施しているが、後期は2回実施である。1つは、文化振興課との共催で、市庁舎を会場として年3、4回実施している「地産地SHOWコンサート」を、その内の1回分を生涯学習センターのホールを会場として開催した。アンケートの集計はまだできていないが、非常に多くの応募があった。3月はこれからスプリング等のコンサートを実施する。定員は143人と書いてあるが、これは関係者15人分をあらかじめ除いているので、トータルでは158人である。

事務局：「大学共催講座」についてご説明させていただく。まず昭和薬科大学との共催講座であるが、毎年異なるテーマで、年1回講演会という形でお話いただいている。今年度は「地域医療、在宅医療」をテーマにお話いただいた。応募倍率は0.54倍で、76人が受講した。NAVIを見て応募された方は14%である。例年70代のシニア世代が多い講座であるが、今回は20代を始め幅広い年齢層の参加が見られた。反省点としては、まちチャレ市民企画講座と同じ日程で、似たような大学の講座が重なってしまい、係内で情報を共有できていればという反省があった。続いて、和光大学との共催講座であるが、こちらも毎回異なるテーマで、3回連続の講座で実施している。今年度は「死にいかに向かい合うか：ユーラシアの民族伝承から考える」というテーマでお話をいただいた。応募倍率は1倍で、30人が受講した。受講生の3分の2は女性で夜開催の講座にも関わらず、多くの女性に参加い

ただいた。反省点としては、年齢層は年配の方が多く、若い世代の参加はほぼなかった。

事務局：「生涯学習センターまつり」についてご説明させていただく。生涯学習センターを活動場所としている団体が主役のイベントとして、今年で第8回を迎えた。10月25日から27日までの3日間で開催し、参加者は2,461人でほぼ昨年と同規模であったが、ここのキャパシティがあるので、これ以上参加者を伸ばすことは難しいところである。このセンターまつりの実施にあたっては、企画委員を募集し、この企画委員と、各団体から1名出していただき、コーディネートも含めて色々と考え、市民がつくりあげるイベントとなっている。

続いて、地域展開の事業についてご説明させていただく。地域での展開ということが大きな課題となっており、その解決策の一つとして、地区協議会と色々と地域課題について話し合いながら、事業を展開するというところで行っている。今年度は鶴川地区と行った。毎月第3水曜日に、鶴川地区協議会がポプリホールで実施している「3水スマイルラウンジ」の中に、共催事業として「まなびのひろば」を6回実施した。参加者は、地元の方を中心に各回20名から30名である。今年度は特に同時期に、国際版画美術館と文学館で鶴川に関連するイベントを実施していたため、その紹介も行った。そのような意味では、町田市にとっても、それぞれの活動や事業を紹介する良い場になったと思う。鶴川地区以外では、玉川学園・南大谷地区と、高ヶ坂・成瀬地区の方たちと話を進めているところである。ただ、難しい点としては、鶴川地区で成功したやり方がそのまま当てはまるわけではないということ、協議を続ける中で感じている。地域に行き、そこのキーパーソンになる人たちと直接話をしなければ、それぞれの地域の思いやニーズを見つけられないということ、痛感しているところである。鶴川地区についても、この3年間、安定して「まなびのひろば」を実施させていただいたが、昨日、鶴川地区の方とお話をする中で、新しい課題や違った思いがあるということが、話を進める中で確認できた。これまでとは違う展開というものを目指さなければいけないと感じている。

事務局：「まなびテラス」についてご説明させていただく。毎週金曜日に2時間実施している。今いらしている方は、不登校や精神障がい、発達障がいの方が多い。また、外国に住んでいた期間が長く、日本語が話せない方もいる。学習者の支援者、教える方のボランティアの人数は、25人から30人ぐらいである。

事務局：「陶芸講座」についてご説明させていただく。昨年度と同様の講座になっている。「縄文土器を持って帰れる」ということで、受講者の満足度が高い講座である。後期に予定していた陶芸講座は、陶芸窯の老朽化が進み、点検業者から危険な状態との指摘を受けたため、使用するのには難しいと判断し中止とした。併せて、市民大学の卒業生が陶朋会という会をつくり、陶芸スタジオで自主的に陶芸の活動をしていたが、2年前に市民大学の講座が終了し、新しい会員も入ってこないということで、今年度いっぱいでの会の活動は終了とのことである。

センター長：私からも今の陶芸事業について少し補足させていただく。下小山田町のリサイクル文化センターの近くにある、陶芸スタジオという場所を使用して、25年間ぐらいに亘って事業を行っている。ただ、今説明があったとおり講座が終了したことや、もともと2基あった陶芸窯が、1基ずつ使用が危なくなり、安全に配慮したかたちで事業を継続していくことが困難になった。陶芸事業については、センターや生涯学習部の中で今後のかたちを考えてきたが、窯がもう使用できない状況の中で、陶芸講座を続けていくことは困難ということで、今年度をもって陶芸事業は終了するというので、よろしくお願ひしたい。ただ、陶芸スタジオ自体は市の財産として残るので、今後は建物をどのように有効活用するかということ、生涯学習部の中で、また市の中で検討していく。

事務局：「生涯学習入門講座」についてご説明させていただく。生涯学習入門講座については、お手元のチラシに記載のとおりである。これは、6月にまた開催する利用者交流会に続く講座である。以上である。

続いて、時事問題講座について、これから開催する講座であるが、時事問題講座とは職員が提案した講座である。1番の若宮さんの講演会については、定員150名のところ158名の応募があり、募集して2、3日で締め切った。2番目の藤井恵さんの調理実習については、定員が30分で埋まった後も50人以上の応募の問い合わせがあった。3番と4番については、現在募集中である。3番についてはチラシをお渡ししているので、後ほどご覧いただきたい。5番のパラグアイの伝統レース編み、ニャンドゥティ講座については、この講座も募集開始30分で定員が埋まり、その後も50人以上の応募の問い合わせがあった。6番7番はこれから募集する。8番の「星に語りて」の映画上映会は、ちょうど終わったところで、80人の参加があった。

事務局：文科省委託講座・イベントなどについてご説明させていただく。文科省から「障がい者の生涯学習を推進するための事業」を行いなさいという委託事業を町田市が受託している。本来であれば、前期の時にご報告すべきだったが、1番目の「若葉とそよ風のハーモニーコンサート」については、今まで実行委員会形式で行われていたものを、初めて市の主催事業としてやってみようということで、このために受託事業をスタートしたという経緯がある。応募者数は、定員が600人のところ577人であった。今までやることができなかつたことを、事業として実施することができたからこそ、今まで以上に学級生の声を集めることができたことが成果だつたと考えている。続いて、「障がいのある人の生涯学習を考える」については、当事者や支援者など色々な人が集まって、どうやって生涯学習を考えるべきかを話し合った。続いて、「自分だけの踊りと出会う旅」については、こちらはダンス講座である。当事者や支援者、踊りに興味がある人が参加して、一つの作品としての踊りづくりをしていくというものである。発表の場もつくり上げているので、参加者の満足度が高い講座であった。続いて、「スタッフ研修 青年学級の新しい流れ」については、障がい者の学習支援に関わる支援者が、町田に限らず、都内や関東近郊から

集まり、人数としては98人が参加した。多くの参加者が、支援者同士のつながりをつくることができ、意義があるものとなった。最後に、「障がい福祉課共催 サルサガムテープコンサート」については、チラシを配布しているので、ご覧いただきたい。

会長：それでは、ただいまの説明についてご意見、ご質問はあるか。

委員：陶芸について、2つの窯が老朽化しているということだが、1991年にできた陶芸スタジオの建物含めてどこで検討し運営していくのか分からないが、センターとしてやはり事業の一つとして捉えて陶芸の事業を推進していくという考え方があるのか、それとも、それは次の審議会やどこかでその方向性を考えさせるのか。

センター長：陶芸は93年、94年から市民大学の事業として行っているが、委員がおっしゃるとおり元々は人気の講座であったが、段々と申込者数が減って下火になっていったという状況がある。また、先程も申し上げたとおり、2基あったうちの1基が故障し、もう1基についてもやはり安全に配慮したかたちで使うことが厳しくなっている。業者の点検によると、安全確認が常に必要との状況である。そのような中で、場所がここから離れていることもあるが、陶芸講座を継続していくことは非常に困難になっている。修了者団体の活動もここで終了ということもあり、センターとしては、この陶芸講座については、今年度をもって終了というかたちにする。ただ、建物の活用については、違つかたちで、まず生涯学習部の中で、他にどのようなかたちで活用できるかということを検討していく。またそれが、さらに他の部署を交えてのかたちでの検討になるかもしれないということは、今後の検討事項である。あとは、市民大学の「HATS」の名称で、「ART」という部分があるので、陶芸事業がなくなると「ART」の部分が行われなくなることになるので、来年度は「ART」の部分について、例えば国際版画美術館など他の部署と連携を図りながら、何かしらの芸術に関するような講座の再構築ということを今検討している。

委員：文科省委託講座について、委託料はいくらか。

事務局：300万程度である。

委員：5講座で300万か。

事務局：そうである。

委員：ということは、1講座60万ということか。

事務局：そうではなく、全体で300万である。

委員：実行委員会形式で今までやってきたものを、文科省委託講座でやったという話であるが、実行委員会形式の時の費用はどこから出ていたのか。

事務局：参加者や加担する方たちが、手弁当で行っていた。

委員：「まちチャレ」について、アンケートのところで、「アンケートに無し」と書いてあるが、設問がなかったのか、アンケート自体がなかったのか、また、アンケートは主催者側が書かせたものか、それともセンター側としてアンケートをとってくださいとお願ひしたのかを確認したい。私がアンケートを作成するとしたら、やはり「センターを何で知ったのか」「何を見て参加したのか」ということがとても気になるが、その設問が全部に設けられていないのは分かりづらいので、設問は統一していただいた方がデータをとり易いと思った。あともう一つは、その他事業の地区協議会のところについて、(2)と(3)の他の地区協議会の名前が出ているが、いずれ10地区協議会になっていくのか、行政側からの働きかけなのか、地区協議会側からやって欲しいと言っているのか。

事務局：「まちチャレ」のアンケートについて、担当者ごとにアンケートを作成しており、設問の統一ができていなかった。今後は、統一を図っていきたい。

事務局：「まちチャレ」の場合、市民団体が自分の聞きたいアンケートの原案を持ってくるので、そこから作成している。職員が入れ込み忘れたと考えられる。

委員：どこで知ったのかが、一番気になるので。

事務局：地区協議会について、生涯学習センターの事業というものが広く地区協議会に認知され「地区協議会でこんな課題があるけれども相談に乗ってくれないか」と、生涯学習センターの方に声を掛けてくれればありがたいところだが、いかんせんそのような状況ではない。市民協働推進課が各地区協議会の窓口になって、状況を把握しているので、地区協議会も深くやっている地区もあれば、まだできたばかりで、どうしようと悩んでいる地区もある。さらに情報をもらいながら、今のところは生涯学習センター方からアプローチをしているのが現状である。なので、その他の地区でも、もしこんなことがしたいということがあれば、是非ともご相談させていただければありがたい。

委員：いいえ、もういっぱいいっぱい。もう既に相談し検討しているのか。

事務局：地区協議会も実は連合体であり、そこである程度、他の団体のように目標があつてというわけではないので、課題を調整する難しさがあると思う。まずは、その役員の方と話をし、地区協議会の活動が活発になるような提案ができればと考えている。

会長：これは、生涯学習推進計画の中の1つのテーマで、毎年1つずつ増やしていくという計画にはなっている。先週、地区協議会の成果発表会で、鶴川地区協議会と相原地区協議会で、生涯学習センターと連携しているということを明確にプレゼンテーションしていた。その2つの地区については定着していると思う。次に、この2つの候補の地区があつて、どうなるのか、というところである。〇〇委員は何かあるか。ここで、共催事業のあり方を見直すとの話があつたが、役割をどう考えているのか。

委員：地区協議会は、自治会長が5月に入れ替わり、5月の終わりには総会で、予算は4月からの執行だが2ヵ月間の空白があり、6月からやる。役員も単年で変わる傾向があるので、引き継ぎをしてもらうことと、総会の段階では、生涯学習センターと共催で何をするのか、もともと入れ込んでおく必要があると思う。年度の途中で「いかがですか」と言っても、中々動きようがないと思う。タイトではあるが、新しい自治会長が決まったという情報を市民協働からもらったら、直ちに新しい自治会長にコンタクトをとる必要がある。地区協議会側としては、そんな眠れなくなってしまう程、負担がかかるものではないと思う。鶴川地区のように毎月毎月でなくてもよいと思うので、1回何かやってみるとよいのではないか。

会長：他に何かあるか。それでは時事問題講座について、どんな方が提案したのか。

事務局：事業系の職員が皆で案を出し合い、その中でお互いに投票して、予算の範囲で上から順に決まった。

会長：市民ニーズを的確に捉えており、流石である。色々な世代向けのバラエティーに富んでいる講座、例えば高校生や中学生を対象にした講座も少し考えていただきたいと思う。それでは、ここで公民館事業については終わりにして、次、ことぶき大学についてご説明いただきたい。

事務局：ことぶき大学は、「楽しく学び豊かに生きる」をモットーに、60歳以上の町田市民限定で講座を実施している。

文学コースは、人気のある助川先生に、「村上春樹も話せるけど、実は源氏物語も得意である」という話になったので、今年度は源氏物語でお話をいただいた。ユニークな切り口でとても人気のある講座であった。

健康コースは、ヨガを取り入れた。これは非常に応募が多く、応募倍率は2.8倍にもなってしまった。やはり健康ということは誰にも身近なことなので、42.8%の方が、初めて生涯学習センターに来たということで、入りやすい講座であったと思う。なおかつ、先生と受講者の雰囲気がとても良かったので、その後、「ナマステヨガ」という修了団体もできた。

教養コースについて、東京家政学院大学名誉教授の西海先生は、実は修行者でもあり、初回に山伏の格好でホラ貝を吹いて、非常に面白いお話をしていただいた。

事務局：「まちだ探・探ゼミナール」についてご説明させていただく。明日、学習発表会がある。昨年度から始まったものであるが、後期の短い期間、3ヵ月間だけで一気に発表まで作り上げていったが、今年度は1年間ゆっくり時間をかけて、しっかり学んで調べていこうということで、明日の14時から16時半まで行う。

会長：これもチラシが配られているので、後でご覧いただきたい。私は今からドキドキしている。それでは、ことぶき大学について、何かご質問、ご意見をいただきたい。

委員：ことぶき大学は、予算が別だから、市内の60歳以上の方限定のプログラムをやらなければいけないのか。

事務局：厳密には、60歳以上というよりは、高齢者ということで実施している。

委員：福祉の分野では、来年度いよいよ共生型サービスが、高齢者と障がい者とか、子どもと高齢者のサービスが始まっていくが、高齢者だけのコミュニティも重要だと思うが、例えばおじいちゃんとお孫さんが一緒に参加できるような講座をプログラムをすると、趣旨からズレてしまうのか。

事務局：市が主催する高齢者を対象とした事業が条件である。

委員：孫と一緒に連れてきたというのは、条件に当てはまらないということか。

事務局：孫と一緒に連れてくるのがダメであるとは書かれていないので、一概に対象外とも言い切れない。

委員：ここで、プログラミングが始まって、それこそ〇〇委員もそうなのかもしれないが、やはりプログラミングを学びたいと思う子どもたちに、教えられる60代が結構いる。ことぶき大学も世代間交流にできないものかと思う。

事務局：探・探ゼミナールの受講生の方からは、学生活動報告会や、そういったところとかでも参加したい、自分たちの世代だけでなく、他世代での交流が必要だという声はいただいている。

委員：健康コースについて、定員が50人で、応募者数が178人ということだが、応募倍率は3.6倍ぐらいではないのか。

事務局：そのとおりである。2.8倍は誤りである。

会長：市民大学の健康学とのすみ分けはどうなっているのか。

事務局：市民大学の方は、身体を動かすだけではなく、情報であるとか座学も必ず入っている。ことぶき大学の方は、基本的にはお一人の先生が6回、細かいステップで身体を動かしていくというプログラムになっている。

会長：あんまりきついついていけないと言う人がいたり、一方で物足りないと言う人がいたりということが見受けられるが、どちらかと言うと、軽い方がことぶき大学の方で、市民大学の方がちょっとハードなのか。

事務局：一概にそうとも言い切れない。

会長：それぐらいの仕分けをした方が、全体的には満足度が上がるのではないか。違いがない方が、違和感を感じる。それでは、ことぶき大学についてはよろしいか。それでは、最後に生涯学習推進事業についてご説明いただきたい。

事務局：「学習情報の収集・発信」についてご説明させていただく。下半期の事業内容については、まず「生涯学習NAVI」の冊子の発行部数の見直しを行い、秋号から1,000部削減した。また、町田市ホームページにも掲載しており、そちらも周知していくということで、中心市街地の飲食店へPRカードの設置や、関係団体のホームページに「生涯学習NAVI」の発行についての記事を掲載していただき、町田市ホームページへのリンクを張っていただくなどして、PRをおこなった。10月からツイッターも導入した。成果と課題については、まだまだ「生涯学習NAVI」自体の認知度も少なく、また町田市ホームページに掲載していることも知られていないため、引き続きPRを行っていきたい。また、ツイッターを導入したが、ツイッターを見ているのが比較的若い世代であるため、こちらで取り扱っている情報の中で、どの情報をツイッターで発信していくか、検討しながら進めていきたいと考えている。

事務局：「学習相談」についてご説明させていただく。相談の頻度や傾向に特に変化は見られていない。月間では、はっきり相談と認識できるようなやり取りをするものは、月に10数件程度である。課題の方では、最近の事例で、こちらの施設では色々なポスターを掲示しているが、その時は申込書の類だったが、聞かれた時に配置場所が分からず、正しくご案内することができなかつたので、反省している。朝礼等で、そのような主だったものについては情報共有に努めたい。

事務局：「生涯学習ボランティアバンク」についてご説明させていただく。2019年9月から2020年1月は10件の利用申請があり、新たにボランティアの登録が8件あった。また、センターまつりでPRするため、一日体験講座を行った。その他、各町内会・自治会の代表者にPR用のチラシを送付し、昨年同時期と比較して、利用申請は6件、ボランティアの登録は3件増えている。

続いて、連携組織についてご説明させていただく。こちらは、さがまちコンソーシアム主催の「さがまちカレッジ」について、各子どもセンターとの共催を検討し、昨年11月に子どもセンターただONと共催で実施した。また、昨年度、生涯学習センターが協力し、さがまちコンソーシアムが開催した「町田の魅力を再発見！ツーリズムプランコンテスト」で最優秀賞を受賞した企画を、今年度、それを具現化するというので、「やくしで秋を狩る！」というイベントを実施することになり、生涯学習センターとしては、イベントのチラシ配布やツイッターによる情報発信を行ってPR活動に取り組んだ。成果と課題としては、子どもセンターただONで開催した共催講座では、15名の方にご参加いただいたが、ただON以外の子どもセンターについては、日程や内容等で調整がつかず、共催講座を実施することができなかつた。来年度は、他の子どもセンターとの共催講座を開催できるように、さがまちコンソーシアムと検討していききたいと考えている。

事務局：生涯学習センター（ホール・諸室）等の貸し出しについてご説明させていただく。こちらは、状況の変化が大きなもの2つあった。10月1日、消費税率の改定に伴い料金の改定を行った。特に苦情や混乱等はなかつた。ただ、釣り銭が細か

くなるなど、多少ご不便を利用者にお掛けしている。また、施設案内予約システムについて、これは2000年代初頭から動いているが、これまで特に登録していただいている団体については、代表者やメンバーに変動があるかという確認は行っていなかった。やはり長い年月の間にメンバーが増えたり減ったりするので、これからは3年に1度更新作業をしていただくことが、数年前に決まっていた。2020年3月31日をもって、ほとんどの団体がその更新期限を迎えたということで、一気に年明けは更新作業ということで申請書を出していただいで、登録の有効期限の更新を行った。1月末現在で370件の更新手続きが完了しており、ほぼ1月中に半数を超えることができたが、2月当初、4月の抽選申込に向けて駆け込みの手続きがあった。何とか更新の処理を完了して、団体が抽選申込できる体制を整えることができた。部屋の利用率については、全部の部屋をトータルして、全体平均では78%だった。去年は76%だったので、値上げがあったにもかかわらず、後半も利用はしていただいているということである。

最後に、「特別教室開放」についてご説明させていただく。2019年9月～12月の4校の平均利用率は4.6%、上半期の利用率は4.3%ということで、非常に低いところであり、変動なく低空飛行してしまっている。利用団体は、学校で活動しようということで、非常に狭い範囲の中でメンバーが集まっているサークルが多いので、周知、PRに苦勞している。

会 長：それでは、ただいまの説明について、質問、ご意見があればお願いしたい。

委 員：情報発信のツイッターについて、全然知らなかったが、この中でセンターのツイッターをフォローしている人はいるのか。

会 長：はい。フォローしている。

委 員：それは偉い。ただ、現状は会長ぐらいだと思うので、このメンバーでツイッターをやっている人がどれぐらいいるのかということもあるが、年代も全然違うだろうが、やっている人には盛り上げるためにフォローしていることを私たちに教えてほしい。ツイッターをやっていることは全然知らないと思う。子どもは子どものサイトがあったり、バラバラである。市がどんな情報を発信しているのか見えづらいので、広報まちだとかで「ツイッターを始めました」とか、「ここはこういうことをやっている」とかが分かれば、情報を取りやすいのかなと思った。

事務局：広報まちだには去年の11月1日号に掲載した。館内にもいたるところにポスターを貼っている。

3 その他

- ・第4期を終えて

会 長：それでは、今日の議題は一通り終わって最後なので一言ずつ。時間の関係上一人30秒でお願いしたい。

(各委員から一言)

- 途中からの参加だったが、センターの認知度にとっても驚いた。自分なりにどのようにして認知度を上げることができるか、これから考えていきたい。
- やはりセンターを知ってもらおうということに、我々一人ひとりが何か活動していく必要があるのかなということを最近常に考えている。
- 学ぶというテーマだと本当に多様な方たちがつながれる機会、学び終えた後さらに活動につながると実感しているところであり、つなげていくということをもっと継続していく必要があると思っているところである。
- 運営の仕方で、もし利用者が新型コロナになったら緊急時どうするか、その辺と緊急対応をしっかりと想定して考えていただきたい。
- 私はフルタイムの仕事が終わって、改めてこういった運営協議会のような会議に出させていただいて、それぞれの立場の委員の方と色々ディスカッションする機会があって、とても良かった。これからになるが、生涯学習の講座・イベントに参加していきたいと思う。今回勉強したところも含めて感謝申し上げたい。
- 私はエンジニアの端くれである。生涯学習というのはCPDであり、死ぬまで自己研鑽ということで、自分で調べて、勉強して、社会のために役立つ。一番最初にここにきた時に「スパイラル」という話をした。人生は色々スパイラルで、先程〇〇委員が言われたように、高齢者と子どもなんかは確かにスパイラルの経験モデルとして良いモデルである。お互いに学び合うこと。あと「経験知」という言葉を前回入れてもらったが、もっとシニアの経験知を社会に活かすべきだと思っていて、そこに踏み入れるのは、ここだけではなくて、そういった社会が必要ではないかと思う。高齢者は年金みたいな話ばかりだが、経験知をもっと活かした方が日本の将来のために絶対良いということを私は思っている。今回のような色々機会を与えていただいて、感謝申し上げたい。
- 二年間お世話になった。受け皿がやっぱりあることが、学んだ以上に何を自分ができるのか、活かせるのかって考えた時に、そういった受け皿といっぱいつながって、何かそういう講座たるところで紹介いただく。自主的な参加のかたちにはかることもいいのだけれども、やっぱり受け皿があったり、学んだことを活用できる場が見えやすいと、皆さらに発揮できるのかなと。そういった場になっていけばと思う。感謝申し上げます。
- 私は委員になって10年以上経つが、今回これで委員を退任させていただく。感謝申し上げます。私も色々な生涯学習の現場に訪問することが多いが、いつも申し上げているが、「つどう」「つなぐ」「つくる」というステップがあり、一つ市民の方がつ

どう場としての機能が必要であり、そこに集まった人たちがつながって、何をつくり出すかというその次のステップ、「つなぐ」と「つくる」のステップに行くということが、やっぱり生涯学習センターにとってはとても大事なことだと思うので、その辺をよく整理してどのような事業をやっていくべきかを検討していただきたい。色々とお世話になった。

□私も途中からで、あまり出席率が良くて申し訳なかった。今まで、まちだ市民大学のプログラム委員をやっていたので、どうしても視野がその範囲内だけだったが、お陰様で視野が広がった。特にやっぱり学んだ後どういう風に活躍していただくかという、先程からお話が出ているその部分が市民大学の内側だけ見ると、少し見えづらかった。色々話をうかがって、さっきの不登校の子どもをどうつないでいくかとか、あるいは例えば市民大学を学んだ人に「まちチャレ」で企画を考えてもらうとか、意識して考えていくとか、色々つないでいくことで可能性が新しく見えてくることも随分ありそうだなということを、一年間で学ぶことができた。また、市民大学と他の部署とのつなぎ方というものを勉強させていただきたいと思う。感謝申し上げたい。

□どうも2年間お世話になった。初めの方は結構休みが多くて中々会議に出席できなかったが、少しずつ慣れてきて、ただ私自身がやはり町田市民でもなければ、町田でずっと学習してきた実践者でもないの、ここが私にとっての学習の場であり、学んでいく場だったと思っている。先程、高齢者と子どもの交流という話があったが、前に学生を、座間で「あすなる大学」という高齢者大学をやっているが、そこに十数人連れて行って、1回だけの単発のプログラムではあったが、多世代交流というかたちでやったことがある。学生一人につき高齢者の方6、7人に囲んでもらって話をしてもらうということをやったが、学生のウケは良かった。やはり中々普段交流していない多世代の方たちとお話できて、時間も2時間と短かったこともあり、もっと話したかったという感想があった。そういった形でまた、学生を連れて来られるといいなと思った。感謝申し上げます。

会 長：2年間お世話になった。後半は体調を崩してしまって、皆さんにはご心配、ご迷惑をお掛けした。ちょうどセンターが発足する第1期から委員をやらせていただいて、本当に自分自身勉強になって、8年間続けることができた。その間センター長も4人代わり、職員の方も代わっており、見渡すと〇〇委員と私ぐらいが一番古株になった。今後は一市民として、原点からまた出直していきたいと思っている。一年前から小さな自治会の会長をさせていただいているが、今、集会所を建て替える話をしていて、新しくなったら、専攻コースで技術を身に付けると、近隣の人を集めて、正に学びを地域に広げるようなことをやっていきたいと考えている。感謝申し上げます。

センター長：第4期生涯学習センター運営協議会は、昨年5月から計16回の会議を開催し、今期は「市民ニーズに沿った生涯学習センター事業の推進について」というテーマでご議論いただいた。少子高齢化や「人生100年時代」といわれるような社

会環境の変化を踏まえて、発足からもうすぐ8年が経過しようとしている生涯学習センターについて、市民ニーズをいかに吸い上げるか、改善していくべき点や今後取り組むべき事業はどのようなものがあるのかということについて、ご意見、ご議論をいただいた。今期の報告書は、今後のさらなる議論を深めるための「中間的なまとめ」という位置づけで、次期の議論につながっていくものである。今後、市の計画においても事業内容の見直し、管理運営手法の検討ということが掲げられている。委員のみなさまからいただいた意見をそうした検討、現在抱えている課題への対応に活かしていきたいと考えている。みなさま、どうも2年間ありがとうございました。